学生の資質・能力の向上をめざして

—授業づくりを通して—

伊 藤 宏 俊

Aiming to improve students skills and abilities
— Through lesson development, planning and design —

Hirotooshi Ito

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

学生の資質・能力の向上をめざして

—授業づくりを通して—

Aiming to improve students skills and abilities
—Through lesson development, planning and design —

伊藤 宏俊
Hirotoshi Ito

はじめに

教育基本法第十一条（幼児期の教育）の書き出しに、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、・・・。」とある。人格とは何か、『広辞苑』岩波書店2008には、「①人がら。人格。②パーソナリティー。③道徳的行為の主体としての個人。自律的意思を有し、自己決定的であるところの個人。」とある。ここから、生活が自律的で、道徳的实践力や実践が備わり、自己決定ができる人間像が浮かんでくる。

幼児教育が人格形成の基礎を培うという使命があるのなら、それを教える教師もまた人格者であってほしいと思う。通信学部の学生の授業を担当して3年目に入った本年度は、スクーリングの特性を生かした授業の在り方について考えたいと思い、この今日のかつ不易のテーマである標記の課題について、私の考えを整理し、実践報告としてまとめた。

第1、学習指導要領の改訂

2016年12月21日、中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について答申（案）」が出された。従来の学習内容の変更にとどまらず、指導方法や学校の教育課程の編成にまで踏み込んだ答申である。

改定の柱になっているのは、資質・能力とカリキュラム・マネジメントの考え方である。各教科等を通して身に付けなければならない知識体系とそれを核にしながら、学ぶ力、そして学び続ける姿勢が資質・能力の土台になっている。

2017年3月には新学習指導要領が公示された。2018年度には、幼稚園で改訂教育要領に基づいた教育が実施される。学びの場では、「何ができるようになるか」を明確化させ、知識の理解の質を高め、資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」が求められている。

学校での教え方も変わり、一方的に教え込む形の学びは消えていく。子どもたちは、自ら考え、発言し、自分たちで学びあう中で、発見し、課題解決していく。そして、教師はその援助や支援をして

いくことになる。

こうした状況の中で、教師の存在感はどこに見いだしていくのか。コンピュータはもちろん、電子黒板の活用や動画を活用したプレゼンテーション能力も求められていく。教師は、自ら考える力、自ら調べていく力、まとめ表現していく力、活用力等を具備しなければ、子どもたちの心に寄り添い、師弟同行の道を歩むことはできない。

これからの日本の教育が目指していく方向は、ゆとり教育でも詰め込みの教育でもない。ますますグローバル化していく社会の中では、知識や考え方を知っているだけでは通用せず、自分なりに捉え直し、課題解決に活用し、何か自分なりに創り出すような主体的な知的能力を付けることが重要になっている。「知っている」だけでは通用しない時代に入ったと考えられるが、そのことに関心を示している学生が私の周りにはほとんどいない。

第2、教師の資質・能力を育む

こうした背景の中で、教育現場では、大人の責任感を持った、子どもの心のある（理解ある）人、そんな教師が必要である。

そこで、私の授業を受ける学生の意識調査を試み、実態を探った。

- ・学生の生活実態調査（2017年7月～9月）学生の関心事について

調査対象：本年度スクーリングの受講生（通信学生）・20歳代から50歳代

人数：27名（男子5名、女子22名）

（調査の結果から）

- ・受講の目的は、一人を除いて保育士・幼稚園教諭免許の取得である。
- ・全員の学生が、マスメディア情報の、芸能やスポーツへ高い関心を示し、毎日チェックしている。政治や経済、世界情勢等への関心は低く、積極的な関心を示す学生はいない。
- ・新聞に目を通す習慣のある学生は11人（約41%）、読書量については、1ヶ月に3冊以上本を読む学生は7人（約26%）、0冊の学生も8人（約30%）いる。本を読むと答えた学生も、文学作品や幼児教育の専門書が3人、他は、趣味の本、雑誌類である。
- ・趣味、特技について問うと、野球、水泳、バレーボール、テニス、ジョギングに5人（約19%）、音楽関係（ピアノ・和太鼓・フルート・ギター等）に7人（約26%）、他の15人は、スポーツジム、英会話、買い物、料理、寝ることであり、「なし」と答えた学生も3人いた。英会話を始めた学生が3名おり、英語教育にかかる関心の高まりを感じるとともに、体力づくりや専門性にかかわる趣味や特技のある学生が、予想外に少ないことが分った。
- ・教師の資質として必要な資質については、教育愛12人、使命感13人、専門性1人、公共性（社会性）5人。わからないと回答した学生も3人いた。（複数回答も可）
- ・私の受講生には、子どもが好きで、教師が天職と考える一方で、専門性は特に必要ないと考えてい

る傾向にあると分かった。

- ・ 幼児の「生きる力の基礎」を培うための「感性」を育むことは必要か。に対して、25人(93%)が必要と応えており、他の2名は、わからないと答えている。

上記は、通信教育のスクーリングで私の授業を受ける学生の、ほんの断片的な調査ではあるが、学生の資質の向上を追求していくことは難しいことであると思えた。

中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について 平成23年1月31日』の答申においても、キャリア教育の定義である、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育が、十分ではないことがうかがえる。」との報告がなされている。私も、通信教育のスクーリングの授業を通して、学生に、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程の実践力が不足しているのではないかと考える。

そこで、授業を通して、可能な限り、学生の主体的な学びへつながるような、私の授業の改善を試み、学生の実践力を育む糸口を模索した。

1. 「こどもと環境」の授業を通して

アンケート調査の「感性」を手がかりに、授業を仕組むことを考えた。

ここでの学びは、領域「環境」の内容を書き写させたり覚えさせたりすることではない。子どもたちとかかわる中で、環境構成を通してどうに関わっていくのか、具体的な体験として内容を定着させるために、どの様な援助が必要なのかと、観察し、考え、工夫する力を育成することである。

(1) 学習課題として、下記の環境構成の中で考えさせることにした。

K幼稚園の秋、園庭にはコスモスが咲いていた。私が実際に耳にした、園庭でのF教諭と園児Sとの会話を提供して、考えさせた。

S：「先生、ピンチュとしろの花が好きだよ。きれいです。」

T：「Sちゃん、こっちは、ピンチュじゃなくて、ピンクって言うんだよ。ピンクと言ってごらん。」

S：「ピンク。」

T：「上手にピンクが言えたね。」

(2) 課題は「ここで、F先生の言葉かけ(対応)についてみんなで考えてみましょう。」である。

(Qは、発問。・以下に、発言や反応等を記述した。)

Q1：まず、各自、自分の考えを書き出してください。(ワークシートに記述)

Q2：グループで、話し合いをして、その要点を、代表者がまとめて発表してください。

- ・ 4人のグループを基本にして、討議の時間を設定。静かな様子が、一変して、話し合い活動となる。自分の意見が手元にあるので、意見は出しやすい。しかし、他人の意見を聞いて、発展的に

述べていくことは難しく、司会者を決めて、まとめさせることにした。

- ・「5歳児くらいになると、きちんとピンクと言って、色が認識できると思うから、きちんと言葉の勉強をさせることはいいことである。自分でもそのように言うだろう。」と述べた学生が多かった。(特に問題意識はなかった。)

Q3:「子どもの心に寄り添う。」という言葉を私たちは良く使いますが、F先生の「Sちゃんの心に寄り添う」というのは、このような言葉かけでよいのでしょうか。

- ・学生は、言葉では、子どもの心の寄り添うと知っている。子どもの心に寄り添うという観点から考えさせるようにした。(グループ討議、司会者交替)
- ・10分間のフリー討議であったが、学生からでた言葉かけの代表的なものは次のとおりである。
「お花がきれいだと、Sちゃんは見つけたんだね。Sちゃんみたいだね。」
「コスモスの花はきれいだね。先生も大好きだよ。Sちゃんは、ピンクのお花が一番好きなんだね。」
「みんなでお花のお世話をして、いっぱいきれいな花が咲いたね。Sちゃんの好きなお花を、教室の中にも飾ろうか。」

Q4:花を観察する観点から見ると、次にSちゃんにどのような言葉かけをしますか。

(Q3の意見と重なったグループもあった。)

「Sちゃんの好きなコスモスの花は、8つに分かれているね。お花の色は、他にも、赤や白やピンクやオレンジ色で、みんなきれいだね。」

「春の桜の花にも似ているね。Sちゃんのおうちにも咲いているのかな。」

「先生とお部屋にもって入って、お花の絵を描いてみようか」等、である。

課題や発問がこれでよかったのかという問題は別にして、実際場面で私が出会った例を挙げることで、学生の関心も高まった。学生は、「心に寄り添う」と言う言葉をよく使い、好きな言葉であるが、具体的なイメージがなくても使っている。

学生は、話し合い活動を重ねていく中で、Sちゃんの「ピンチュ」ということば使いにはこだわらずに、情景をイメージしながら、様々に語るようになり、学生の表現力も豊かになった。

私は学生に、よりコスモスに関心を持ってほしいとの願いで、二つのことを観察してみても提案して、授業を終えた。

「1つは、台風で倒れたあとのコスモスは、どのように育つでしょう。もう1つは、コスモスの中に星が見えます。あなたたちの目で確かめてください。」と、学生の主体的な学びを期待して、オープンエンドの形でこの課題についての授業を締めくくった。

学生の授業後の、振り返りのカードを読むと、「様々な意見が出て、自分もその中に参加して意見を言ったこと。子どもの心に寄り添うことの難しさ、言葉かけの難しさを知ったこと。学びの素材が身近にあることを知った。」等々、100字以上に各学生がまとめており、双方向性のある授業づくりに手ごたえを感じた。

授業を振り返ってみると、最初に自分の意見を書くことで、自分を見つめることができ、グループでの討議で他の考えも受け入れて自分の考えをまとめ、全体での討議を通して気づきや深まりができ、自分の考えを深めることで変容できた。こうした段階を踏まえて、振り返りの自己評価では、自分の言葉で、確かな学びへとつなげている。書くことは、考えることでもあり、うまく表現できていなくても、授業での発言とともに学生を見ていくと、より確かな評価ができる。

授業では、学生に「感性」ということの意識を持たせ、教師として、子どもたちの前に立つことへの自覚を前提に、学生の五感を働かせることで、一人一人が個性を發揮し、自分自身の体験や感性をもとに、発言することを求めてきた。

「感性とは、それを育む環境構成とは。」と、学生は自由な発想で討議を進め、自分を見つめ、自身の体験や幼い頃の経験をもとに、五感を研ぎ澄ませて話し合いをした。体験に基づいた発言は、多少長くなっても、他の学生も興味を示して聞いた。書籍に書いてあることを見つけて述べるのではなく、実践的な内容こそ、自分が置かれてきた環境の中からの、その人の感性そのものであると考える。

2. 「こどもと体育」の授業を通して

感性を表現する『まねっこ体操』づくりをテーマにして、授業改善に取り組んだ。『まねっこ体操』を表現遊びにつなげることを考えた授業づくりである。(学生の約8割は体育が嫌いであり、苦手であると自己申告している。)

実際の教育現場では、子どもたちは、まねっこして表現遊びをすることが好きである。リズムカルな曲がかかるだけで動き出し踊りだす。タンバリンの音、ピアノのリズムに反応する子どもたちをイメージして、より体育的な動きづくりにできないかと考え、動きを創る授業づくりに取り組んだ。

(1) 『まねっこ体操』の動きづくり

- ・まねっこ体操の基本を、左右の軸足の体重移動とした。右足、左足、右足、左足・・・とし、ここにどのように体の動きを乗せていくかを考えさせた。

- ・曲(リズム)がある方が、気持ちよく動けると言うので、曲をかける。

(曲名：The Loco-Motion、1974年のGrand Funkの曲)

(もう少し速いテンポの曲の方が動きやすいと、学生の意見がでたが、しっかりとした体重移動をすることを体操の基盤としたので、このテンポを基調にした。)

- ・軽い乗りでの動きを考える。

手拍子をつける。

手の上下、体のひねり、サイドステップでの左右の動き、様々なバリエーションで動く。

1つの動きは、1分間程度として、苦痛にならないようにした。

(脈拍数が、触診で測定できる1分間で120~130拍程度まで)

(2) イメージをリズムに乗せる

- ・ボール投げ、ボールつき、なわとび、スケート、水泳、フラダンスをまねた動きを作った。
- ・イメージの動きを変えるときは、膝を叩いたり、床を叩いたりして、間をとることにした。

上記の①②を、休憩後の授業の開始時に、ルーティン化して、前に立つ学生が代わる代わるに立って、リズムに乗って楽しく（笑顔で、リラックスして）動けるようにしていった。

学生の中には「準備運動のストレッチ体操にも、曲が流れる方が、大きくゆったりとした曲げ伸ばしができる。指先まで表現ができる。」と意見を出した学生がおり、実際、「葉加瀬太郎と喜多郎が演奏するMy Favorite Songs」からバイオリンとオカリナの静かでスローテンポの曲を流すことで、学生の動きがその曲に乗って、ゆったりと動くことが確認できた。リズムと運動については、密接な相関関係が成り立つように思える。

(3) 授業の課題は「身近なものを使って運動遊びを考えよう。」である。

- ・導入は、「まねっこ体操」のことは、考えずに、自由に考えさせた。

(4) 材料を探して、運動遊びを考える。

- ・タオル、新聞紙、空き缶、空き瓶、ペットボトルが材料としてあがった。
- ・それぞれに、どんな遊びができるかやってみることにした。意見を出した学生の所属するグループで考え、グループ員の学生の指導の下に、全員でやってみて、実践化につなげるための改善点を出し合った。
- ・競走遊戯としての遊び

タオルで両手を引っ張って、腹で床を滑る、〇〇運びゲーム。

タオルをぞうきんとして使って、お掃除競争ゲーム。

空き缶、空き瓶、ペットボトルを立てて倒す、ボーリングゲーム。

新聞紙乗り、チームワークとバランスゲーム。(2つ折り、4つ折り・・にして、4人全員が新聞紙にどこまで乗れるかを競う。)

- ・鬼ごっこ

新聞紙のしっぽ取りゲームやハチマキ取りゲーム。

缶けりゲーム。

- ・競走遊び

タオルやペットボトルをバトンにして、競走。

新聞紙を細く長く切って、お腹に巻き付け、落とさないように走る競走

*新聞紙を使ったお掃除競走もやってみたが、薄くて、うまく使えなかった。

(この遊びはフロアの掃除として最後に使うとよいと振り返りに書いた学生もいた。)

学生は、身近なものを使って、運動遊びが工夫できることが体得できた。また、自分流に工夫して、教育現場で活用できるようにしたいと、丁寧にイラストを添えて記録を残す学生もいた。

(5) 新聞紙を使って

材料について考えさせる中で、「新聞紙が、手軽で身近にあり、活用しやすい。」と意見が出たので、材料を、新聞紙に限って、『まねっこ体操』と結びつけた運動表現を考えることに発展させた。

Q1 新聞紙を使った『まねっこ体操』を考えよう。(各自考え、記録に残す。文字や図で書く。)

Q2 グループ(4人)で、2種目に絞って、曲に乗った動きを創ろう。(4種目まで可)

- ・グループで、表現方法を工夫し、練習する。(まとめ役はグループ内の互選で決める。)

Q3 「まねっこ表現」を発表し、みんなで楽しむ。

- ・新聞紙を衣装として使う。(しっぽ取りゲームやハチマキ取りゲームをイメージして作成。)

- ・手にもって、風を表現しながら、曲に乗って動く。(上下、左右に動かす。)

- ・新聞紙を丸めて、棒体操のイメージで、ラジオ体操をモチーフに動く。

- ・動きの指導は、一人ずつ教師役になって、教師と園児の役割演技の形で実践した。必ず、4人全員が代わる代わる、前に立ち、同じように見えても、表現力の違いに気づかせた。何が違い、どこが違うか考えさせた。

- ・自分と、自分のグループだけでなく、他人の演技もよく見て、パフォーマンスの違いに気づかせた。

Q4 そこで「表現力をアップさせるにはどうすればいいだろうか」と問う。

(学生の意見を聞き、実践する。)

- ・左右への、一定のリズムではなかなか表現しづらい。様々なリズムの曲が必要である。新聞紙を使った表現には、限界がある。

- ・パントマイムを採り入れると、面白くなる。お掃除やガラス拭きの表現も取り入れて、少しコミカルにしたり、押す動作や引く動作を入れたりすると面白くなるのではないかと学生が提案し、全員で動いてみると、新聞紙を使わなくても、全体の雰囲気が一気に盛り上がった。

- ・同じ動きでも、目線、指先の方向、腕の位置等で、ずいぶん違いがあることに気づかされた。

Q5 先生と園児の設定で、『まねっこ体操』の先生になって指導しましょう。

学生が、一人ずつ前に立って、まねっこ体操の先生となり、他の学生が園児であると設定して、模擬授業の形にし、成果を発表させた。

- ・新聞紙を持って、風になりきって、風の動きを表現した学生。また、その新聞紙の大小にして、動きを変える指導をした学生。

- ・新聞紙を丸めて棒にして、体の上下、左右、ひねりも加えて体操に仕上げた学生。

- ・新聞紙一枚を広げ、人に見立てて新聞紙を踊らせて、言葉かけを通して、全体を動かす学生。

- ・新聞紙で、紙鉄砲をつくり、その音を鳴らしながら、大きな動きで表現した学生。その様子を見て、紙鉄砲を2つ作成して、両手に持って、パン、パン音を出しながら動きを楽しんだ学生。

- ・動きに変化をつけるために、タンバリンを打って、スピードや強弱を表現した学生。

学生のパフォーマンスには、各人の個性や感性があり、同じ動きのようでも、少しずつ違いもあり、

学生もそのことをよく観察して、その気づきを発表した。一人一人がみな違うことに気づかせた。

また、模擬授業をすることで、一人一人の個性を表現することに挑戦し、身に付けたパフォーマンスを教育現場で実践してほしいと考えた。

(6) 『まねっこ体操』から、表現あそびへ

学生からの申し出で、各グループで、学生の手持っているスマートフォンの映像録画を取り入れて分析を試みることも可とした。各グループには、1人以上、そうした機能を活用できるスマートフォンを持っており、自分たちの動きを見つめながら、仲間の意見も加えて、そのものになりきって、ダイナミックに動くことができた。私は、それは表現運動であると評価した。そのことで、自己評価にも、指先や目線まで、細やかな評価もできていた。

「まず楽しく、そして美しく、最後に力強く」とみんなで声かけ合ってきたが、徐々に、よい動きに変わっていき、その学生のセンスの斬新さと心が解放された時の動きのパワーに驚かされた。仲間の表現を見て、感想を述べることで各人の動きも洗練された。

(7) 凧づくりと凧あげの運動表現から「ぐにゃぐにゃ凧づくり」

授業の最後に、私の実践(小学校低学年の体育の時間での実践)を提示して、「関心を持った人は、教育、現場で実践してみてください。そして、様子を教えてください。」と話して授業を締めくくった。この内容は、以下の通りである。

- ・PTAの親子活動で、家庭用のごみ袋と竹ひごを使った簡単な8角形の凧を作る。学生にも作り方を図示し、凧の見本を見せ、簡単なものであることを強調した。
- ・親子で作った凧を、凧あげをして、グラウンドを走り回る。
- ・次に、体育館で、凧あげの様子を、児童の表現運動で表現する。教師が、最初のきっかけの動きをして見せることで、様々な表現で、体育館いっぱいに動き回り、児童は、時に立ち止まって、凧あげを表現した。声かけをする度に、より大きな表現になり、動くことができる。

(動きに変化をつけるためには、タンバリンを活用した。)

学生は、その時、私が使った、ハチャトゥリアン作曲の「剣の舞」をCDで聞いたとたんに、「この速いテンポの曲想で、子どもたちの情景が目に見えよう。この凧作りを自分もやってみたい。」と言う学生もいた。体験を通じた学び、その表現力を磨くことに関心を持ってくれたことで、この授業の目標が達成できたと感じた。

教師からの一方的な講義形式で知識や動きを受け身で覚えるのではなく、学生が主体的に参加して、仲間と考えながら課題を解決していく力を育てたい。今回は、グループワークを取り入れ、講義形式からの脱却を目指し、学びは、主体的な活動であり営みであることを学生には自覚させたいと考えて授業を仕組んだ。

学生の意欲的な学びの姿を見て、彼らの感性が表出され、『まねっこ体操』から表現あそびへ繋ぐことは、感性の表現そのものであると確信した。子どもたちの感性を育むためには、気づきを促す教

師の力が必要であり、それは、教師本人の気づきや感性が豊かでなければ子どもの感性は磨かれない。

第3、授業を終えて

1. 感性を育む

学生には、将来教師として、子どもたちの前に、笑顔で自信を持って立ってほしいと願っている。そのためには、まず、自分を見つめる時間を作ることの大切さを説き、授業でも、ワークシートに書くことや授業の振り返りの記録を書くことを求め、その時間を確保するように努めた。
(・以下は、学生の授業後の気付きや感想である。)

- ・ 子どもが、草花を見て「きれい」と言ったときに、その言葉を聞き逃すのではなく、その言葉から次の活動へつなげていくことが、保育者の感性であり、その臨機応変な関わりが子どもの感性を育てることになると思う。保育者は、一方的にやらせるのではなく、子どもが主体的に活動できるようにすることが大切だと思う。(通信 30 代女性)
- ・ 感性とは、五感から何かを自分で感じ取れる能力であると考え。同じ物を見ていても、人によってそれは美しく見えたり、汚く見えたり、また、何も感じる場合もある。1つのことを見ていても、そこから、なぜそうなったのか、どうやったらこんな風に見えるだろう。自分にもできるかな。調べてみたい。やってみよう。知りたい。と、主体的に動いていける原動力になるものの基礎が感性であると考え。そうした感性によって、人間の生活も発展してきたと考える。感性を育むための環境構成は、子どもに多様な体験をさせることが大切であると考え。(通信 20 代女性)
- ・ 体育は心の健康運動である。いやいやしたら損をする。緊張感や勝負の世界が体育だと思っていて、その言葉の響きだけで嫌いな教科だったけど、子どもと接するための大事なツールであり、子どもたちと楽しむための実践力をつけることが大切だと思った。様々な運動遊びも、ふれあいの世界で楽しむことだと思え、少しだけ自信のようなものがついた気がする。

(通信 30 代女性)

小さいころからコミュニケーションをとることが苦手な子は、周りの子と関わることができず、自分の思っていることや伝えたいことがうまく伝えられず、体験不足にもつながる。こうした子どもの心に寄り添う教師の存在は重要である。ちょっとした教師のかかわり方、その専門性が重要で、専門性を磨くために学び続ける教師の存在は、子どもたちにとって大切な人的環境である。

専門性があれば、運動あそびも表現活動につなげる等、質の高い学びに変えていくことができるし、教師が感性を育むことを心がけることで、子どもたちの知的好奇心の高まりを見ることができ、経験値としての教師の実践力が向上する。

2. アクティブ・ラーニング「主体的・対話的で深い学び」

1990 年代に入るところから、アメリカの高等教育の世界で、「アクティブ・ラーニング」ということが言われるようになった。日本でも、平成 30 年度からの学習指導要領の改訂に際して、中央教育審

議会の答申を踏まえて、「主体的・対話的で深い学び」と言い換えて、その考え方を取り入れようとしている。私も、学生には、知識を持つこと、覚えることが学びなのではなく、学びとは、発展的な営みであるということの意識化を図る指導を心がけてきた。今回の授業づくりも、アクティブ・ラーニングの視点から、主体的な学び、対話的な学び、深い学びの3つの観点から授業を見直し、授業を展開してきた。

私の考える教師像、その資質・能力（人格者であるために）は、教育愛（子どもが好き、教師が天職と言える教師）であり、専門性（自らの学びを検証し、研修に励む教師）であり、公共性（社会性を具備した教師）であり、使命感（教育に責任を持つ教師）のある教師であると考えている。

その資質の向上のためには、コミュニケーション能力の向上とともに、双方向性のある交流をするための知識の量・行動力が必要である。使命感を感じる学生には向上心があり、学びに積極性がある。

「自分をよりよくしたい。これを表現したい。」と、振り返りのある学生は、知的好奇心の高まりが見られる。感動のある学生は、幼児教育の世界でも子どもの驚きや発見にも、その子の心に寄り添い、共感したり驚かせてみせたりできる等、豊かなパフォーマンスができる。

目標が明確な学生は、振り返りのシートの自己評価も明確である。何ができて、何ができるようになりたいということが明確である。顔に意欲的な表情が何度も現れ、行動にも敏捷性が生まれる。自分の持てる力を出し切って動くと、達成感の表情や言葉が出てくる。学生の関心意欲をかき立てる授業づくりこそ重要であると考えている。

おわりに

幼児期は身体表現による伝えあいから言語表現による伝え合いへと変化していく時期に当たることから、話すこと、聞くことを中心に、友達と伝え合うことやみんなで話し合うことの楽しさを味わい、そして、また、聞こうとする態度が育たなければならない。

子どもたちが目に見える世界に遊び、実体験を通じた意欲的な学びが見られるのが自然な姿である。そして教師にも、子どもたちの学びを援助するために、確かな資質・能力が必要である。そのためには、研修力を高め学び続ける教師でなければならない。

本学の学生の中に、主体的で実践的な学びの必要性に気づいた学生の存在が見えて、この学びの在り方を次年度へつなげたいと考えることができた。

引用文献 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」 中央教育審議会答申 2016年12月21日

参考文献 幼稚園教育要領解説 文部科学省 平成20年10月